



實相寺 花園会報

令和七年
十二月一日発行
発行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園会
〒761-0450
高松市三谷町
1 8 1 1 番地 1
TEL087-889-3838
編集発行人
山 本 文 匡
<https://www.jissouji.net>

第200号

お寺の掲示板

「われわれが地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上と六つの世界をめぐっているのは、身（行い）と口（ことば）と意（こころ）の三つの行為の結果によるものである。だから、このめぐりやまぬ輪は、このこまのように自分がまわしているのである。それゆえ、この輪を断ち切らねばならぬ。そしたら六道輪廻の苦を受けることはないのだ、と仏法の本旨を感得したのである。」

『一遍上人語録』

捨て果てて』より

坂村真民

大蔵出版

令和八年 年忌法要早見表

☆印は十三仏事

一周忌☆	令和七年（二〇二五）
三回忌☆	令和六年（二〇二四）
七回忌☆	令和二年（二〇二〇）
十三回忌☆	平成二十六年（二〇一四）
十七回忌	平成二十二年（二〇一〇）
二十五回忌	平成十四年（二〇〇二）
三十三回忌☆	平成六年（一九九四）
五十回忌	昭和五十二年（一九七七）

「父母恩重經ふもおんじゆうきやうを読んで^⑩」

「諸行無常しよぎやうむじやう」「諸法無我しよほうむが」(全ての存在は移ろい行き、不変の存在は無いこと)こそが、お釈迦さまのお悟りの根源であり、それに気づくこと、それを受け入れることが「涅槃寂靜ねはんじやくじやう」(穏やかな境地)へと続く仏教の教えです。

人は誰もが歳をとり、やがては死すべき存在です。これは自然の摂理ですが、江戸時代の狂歌師、大田南畝おおたなんぼが辞世の句で

「今までは人のことだと思ふたに俺が死ぬとはこいつはたまらんと詠ったように、頭では理解しているつもりでも、実際にはなかなか受け容れ難いものです。だから

こそ、人は老いることや死ぬことへの心構え、学びが必要なのではないかと思っています。

これまで読んできた『父母恩重經』には、単に親の恩だけでなく、年老いた親の様子も詳細に描写されています。これは中年以上の人に、これから老いていく自分の立場がどうなるかと、若き日の自分が老親にどう接してきたかを思い起こさせる為に説かれているのだと思います。つまり来たる老いを見据えると共に、自らの人生を振り返る契機となるのが『父母恩重經』なのです。

かの豊臣秀吉も足輕の出身だと言われますが、戦国時代は兵士と

然じゃないですか？

して駆り出された農民も多かったでしょう。その頃の人々は常に死と隣り合わせです。治安も悪く、いつ斬り殺されるか判りません。しかし平和な江戸時代、死は非日常になり、さぞ寿命も延びたことでしょう。そうした時代に流行したのが『父母恩重經』なのです。また中国成立の『父母恩重經』は、儒教や道教の影響も受けています。そこには年寄りのあるべき姿も説かれていく気があるのです。

2023年の平均寿命は男性81歳、女性87歳でした。現代では幾つになっても元気で変わらないことが良しとされ、老いることは忌み嫌われます。でもそれって不自

年齢にかかわらず、私は人には「年相応の生き方」というのがあると思います。しかし、戦後の日本ではそうした「分を弁えるわきま」というような考え方は、「平等じゃない、自由じゃない」と否定されました。その結果、何でも自分の思い通りになることが幸福になりました。ただ、実際にはそうはいきません。だから今は自らの不幸を嘆く人が多いのかも知れません。

来るべき未来を見据えるには、過去を振り返ることも重要です。もし両親の生き方から見えてくるものがあれば、それが最後に残された父母の恩だと思ふのです。(終)